

【描きたくなる日を迎えるために― 日本画を描く前の8つの手順】

絵を描く、とは作業ではない。その為に描く前に、描かない時間をつくる。それは小さな儀式のようなもの。この手順書は、線を引く前の「まえがき」、または所作の集まりである。画材に触れることによって、自分の感覚を目覚めさせ、まだ見ぬ世界と対峙するための準備運動をする。

1. 紙を撫でる

描かない。まだ線は引かない。紙に触れるだけ
ここには、何が描きたかったんだっけ？と、やさしくさすりながら、紙に思い出してもらおう。

6. 詩を書く

描く前に、言葉にしてみる。言葉の羅列で、デッサンを試みる。線の前に言葉を置くと、余白が広がる。

2. 水を張る

手のひらより少し大きい器に、水をひとすくい。今日の水は冷たい？ぬるい？それとも、包まれるように柔らかい？刺すようにかたい？自分の手を、透明な水で目覚めさせる。

7. 絵具の色を眺める

岩絵具の粒を見つめる。まだ筆に取らなくていい。ただ見る。必要な色を思い出す。仲が悪そうな色同士が、実は隠れた親友だったりする。私も、色の仲間に入れてもらって、そっと会話する。

3. お茶を決める

水と仲良くなったなら、今日のお供を準備しよう。カップは何にする？茶葉は、冷めてもおいしい“あの子”にしようか。

8. 離れて見る

目に色を叩き込んで、画面から一步下がる。まだ何も描かれていない紙を、少し離れて眺めてみる。そこには、すでに“何か”が立ち上がっているかもしれない。超絶技巧で上手に描くことより、自分の心に、誠実であること。感じた温度、匂い、記憶、言葉。その輪郭線を、そっとなぞってあげる。やってみて。

4. 道具に触れ、洗う

筆の軸を握る。絵皿を手のひらに乗せる。どれも、自分の身体の延長線にあるように扱うこと。使い込まれた道具には、過去の濁りが宿っている。絵皿の裏の汚れにも目を向けて、きれいさっぱり、汚れを流してあげる。

あとがき

学生のころ、「描く前に詩を書かないの？お茶の準備しないの？」と言われたことがある。

5. モチーフと見つめ合う

それは、本当に「花」なのだろうか？本当は「誰か」かもしれない。「どんな私」が描こうとしているのか？あるいは、もう“私”ですらないのかもしれない。

当時は「そんな悠長なこと！」と内心反発していた。でも今では、こうした余白こそが、描くことを可能にしてくれると感じている。この手順は、かつての自分に宛てたものでもある。